

感謝をこめて

滝 静 寿

「光陰は矢よりも迅か…(修証義)」であることを痛感する。この一年は十二本のローソクが一本ずつ消えていくような複雑な思いでキャンパスを眺めてきた。教員として母校に招かれてから三十有余年、入学以来半世紀の長きにわたり大学に拘って来たことになる。二人の愚娘と聳も卒業生という駒澤大学一族であり、縁の深さに今更ながら驚いている。

赴任した時は学園紛争も終末期を迎え、新しい体制が生れる時期であった。短大英文科の構成教員も定まり、その最初の一員として当科に所属することになった。当時は恩師である中島関爾先生、私にとっては三官女であった竹内先生、山田先生、熊崎先生と、岡本先生が専任としておられた。確か研究室は岡本先生と一緒にいたと記憶している。母校の教壇に立つ不安と責任と緊張感は今日でも鮮明に思い出される。当時は、英米文学科や外国語部とすべて共同であった。特に亡くなられた山縣先生を筆頭に外国語部の先生方との交流(野球試合、入試の採点、勤務後の酒席等)はよき思い出の一つである。

時の流れは水路を変え景色を変え速度を加えて今日では、都市型大学として学問、研究、教育はもとより、文化活動、スポーツ面でもその名を世に知らしめつつある。英文科にあっても、他学部学科に先駆け、外国人専任教員を招き現在ではモエ先生、ギャリソン先生、アシユウェル先生と三人のネイティブの教員を有した、世界へ発進する魁の学科になっている。また、大学創設以来初めての女性学部長竹内先生の誕生は、時代の先端をゆく教室だと自負したい。今後形は変わってもその勢いは止まることを知らずと信じている。個人としての思い出を挙げれば、学生引率のヨーロッパ・ツアー、一年間のイギリス研修、文学部荒井先生、外国語部石原先生と一緒に和泉流狂言公演に同行したロンドンのジャパン・フェスティヴァ

ル参加は私の宝である。授業はもとより、学生とのコンパ、スポーツ観戦、観劇等枚挙に遑が無い。家族的な教室を母体に主任、学部長等の任につかせてもらった事を含め、先輩、同僚、後輩の方々に只管感謝するのみである。

私にとっては「人生は歩く影法師、あわれな役者だ。束の間の舞台の上で、身振りよろしく動き廻ってはみるものの出場が終れば、跡形もない…」(マクベスV)ではなく、人生は舞台、恵まれた役者だ、身振りよろしく動き回って、よき思い出とともに、今出場を終える。

益々の発展を祈念しつつ、感謝しながら退場することにしよう。

滝先生の退職に際して

梅原敏弘

つい2、3年前に熊崎先生を定年退職で送り出したと思ったら、もう滝さんを送り出す番になってしまいました。本当に月日のたつのは早いものです。滝さんとは26年間も一緒に仕事をしてきましたが、この26年間もほんの束の間という感じさえします。

思えば、私が駒澤短大英文科の専任になった頃は女性の専任の先生が3人おり、我が短大も女子短大の印象が強く、失礼ながら、最初は教室会議でもあまり発言しない滝さんの印象はそれほど強いものではありませんでした。滝さんの人となりを知るのには多少の時間が必要でした。それというのも、昼間の滝さんだけでは滝さんの人柄を知るのには十分ではないからです。滝さんを理解するには教室会議以外の時間と場所の設定が必要だったからです。

その時間と場所とはいうまでもなく「夜」であり、「酒席」であります。「稀代の酒飲み」だという噂は時々耳に入っていましたが、それが単なる噂ではなくなるような機会が何回か訪れるようになって、初めて滝さんのシ